## 第 12 回市史講座ミニレポート：平成 31 年 3 月 16 日（土）

「松江城下絵図とデジタルマップーその構築・分析・活用までー」

渡辺理絵先生（山形大学農学部准教授）

今回の講座では、山形大学准教授で絵図・地図の研究が専門の渡辺理絵先生より、これまでの松江市史編纂過程の中での城郭図研究と城下絵図研究の研究成果を、史料に基づきお話しいただきました。

お話は、第 1 部城郭図研究、第 2 部城下絵図研究から構成されていました。

第 1 部城郭図研究では、先生の松江城城郭図調査のきっかけをお話しいただき、松江の城郭図の研究（松江城関係図の所在調査）に関する 3 つの画期を紹介されました。

画期については、（1）島田成矩氏、和田嘉宥氏ら建築史学研究者による調査、（2）松江市教育委員会などによる石垣修理事業に関する調査、（3）松江市史編纂事業に関する悉皆調査、を示されました。

次に、『松江市史』では、城郭図分類の試行として、松代城の関係図に関する分類を参考にし（長野市編 2006）、松江城関係図の現存状況に則して大きく分類したと紹介されました。この絵図分類により進められた松江城郭図研究から分かった新知見として、「幕府へ提出の城修理許可申請文書に

添付する絵図」（城郭修理図）について詳しく紹介され、松江に残るこの種の絵図は、延宝 2（1674）年のものが最古であり、次いで元文 3（1738）年、安永 2（1773）年、安永 7（1778）年、天保 11（1840）年（原本不明、その写しが現存）、元治元（1865）年と全 5 葉であること、いずれも本丸・二之丸・三之丸を描き、破損の箇所に朱線をひき、その下部に破損の状態を記していることを示されました。着眼点として、修補許可の文言の変化や、延宝 2 年の城郭図と正保城絵図との近似性を指摘されました。初期松江城天守の姿については、従来より「正保城絵図」天守図の評価をめぐり議論がありましたが、和田嘉宥先生らの研究により「正保城絵図」の評価刷新が行われたと紹介されました。

第 2 部城下絵図研究では、最初に「正保城絵図」以前の松江の城下絵図について紹介され、城下町を起源とする全国の都市では、「正保城絵図」がもっとも古い城下絵図であるところが少なくなく、「正保城絵図」以前の城下絵図が残っているところはごくわずかであること、しかし、松江の場合は、堀尾図（「堀尾期松江城下町絵図」）や京極図（「寛永年間松江城家敷町之図」）と複数の初期城下絵図が残っていると、松江城下町の特徴を指摘されました。また、『松江市史』の調査の過程で、宮城県図書館蔵（涌谷亘理家蔵）の「雲州松江之図」が確認でき、これは京極期の絵図と類似するもので大変貴重なものであると紹介されました。

次いで、本講座のタイトルである城下絵図のデジタルマップ化について、詳しい紹介がありました。歴史資料のデジタル化の動きが盛んになってから久しい中で、国絵図など大型絵図についてはデジタル化の動きは鈍かったのですが、国立公文書館などでは円滑な画像の閲覧が可能となっています。デジタル化は利用者の利便性や史料の保護にも役立っており、また職員の業務負担を軽減させる効果をも持つ有効なツールと紹介されました。そして、松江の城下絵図のデジタル化では GIS（地理情報システム）を用いた史料のデジタル化構築に関わられた経験をお話しなされ、研究のみならず教育や観光といった方面での利活用を期待されました。

松江城下町での GIS（地理情報システム）を用いた史料のデジタル化については、2016 年歴史地理学会での発表内容を中心に具体的にお話しいただきました。松江城下町の場合、延享年間（1744～1748）の「松江城下絵図」、嘉永 6 年頃（1853）の「松江城下絵図」を基に、城下絵図の屋敷ごとに番号を付し、氏名を入力。並行して藩士の家禄や格式を列記した「給帳」のデータベースを作成し、これらを氏名に基づいて結合させる。つづいて属地データとして城下絵図の屋敷について一区画ごとにポリゴン（多角形）を作成するという大変な作業であったとのことでした。一連の研究の成果として、２つ絵図（時期）の変遷から、公的施設の増加と屋敷数の増加に注目できるとのことでした。松江藩では、先行研究により藩政改革時に有

能な人材登用のために藩士（新番組士）が増えたことなどが知られていますが、松江藩では、増加した藩士の住まいを、武家地の新設ではなく、既存武家地への収容に求めていたのではと紹介されました。

最後に、今後の調査研究の進展に期待を込めて講座を終わられました。